



窪川の街中から県道19号を北進する。左手に見える米奥小学校の対岸を右(東)へ折れると東北ノ川地区である。東西に流れる北ノ川川に沿った約2kmの集落である。集落の南側に連なる山々は低く、冬でも陽を遮ることはない。この陽あたり抜群の集落には、現在28世帯、57人が暮らす。

地区の東の端の山の向こうは、勝賀野を経て影野へ続く。そのため、昔から、松葉川方面から高知城下へ向かう人々の「近道」となっていた。近代になって、トンネルが掘られたりしたこともあったというが、今は使われていない。戦国期は久礼・佐竹氏の支配下にあったようである。

さて、地区の東寄りの農地の真ん中に誠に立派な榎が一本。堂々と四方に枝を伸ばしている。この榎は、推定樹齢360年以上の名木で、地元では「オツグロ様」と名付けられている。その堂々とした立ち姿からも想像できるが、古くから、ここを往来する人々の道しるべとなってきた。以前は桜の木も並んでいたというが、その桜が枯れてしまったところに、昭和56年、祠が建てられた。すると不思議なことに榎の根元から榎が生えてきた。それ以来、ご神木としても大切にされている。また、地区の長老たちによると、自分たちが子どもの頃の格好の遊び場だったそうで、よく木に登って遊んだものだとか懐かしそうに話してくださった。ある日のこ

と、子どもたちが集まって、いつものように木登りをして遊んでいたところ、一人の子どもが木の上から地面にあった穴に向かって小用を足した。すると、穴の中にいた赤茶色の大きな蛇が飛び出してきた。そして、用を足した子どももがけて木に登り、枝ぶたいに逃げる子どもを追いつけた。驚いた子どもたちが大人を呼びに走る中、逃げた子どもは枝から飛び降り、なんとか事なきを得たという。

その榎から少し西に行ったところに地区の産土神である北野川神社がある。古くは河内神社といったらしい。そこからさらに西の小高い場所に、長福寺という寺があった。この寺は、明治23年の大水害で、近隣にあった数軒の民家もとも流されてしまったのだが、境内にあったナラの木だけが残った。現在は近くにお堂が祀られている。また、ナラの木の下には石碑が置かれている。この石碑は、地区を開いた先人を祀っているという説や、洪水で流された人々を祀っているという説があるそうだが、何れにしても、地区の人々が大切にしていることに変わりはない。



直径1m20~30cmはあろうかというオツグロ様

町のうごき	(1月31日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出	四万十川の水質状況	適正值(mg/l)		2月3日
	男	7,973	-12	男	3	15	14		リン酸	≤ 1.0	測定範囲以下
	女	8,809	-11	女	3	14	13		硝酸	≤ 0.5	0.626
	計	16,782	-23	計	6	29	27		アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下
		世帯数	8,415	-7	(1月中の届出)				アニオン活性剤	≤ 1.0	0.1
		窪川地域	11,879人	大正地域	2,347人	十和地域	2,556人		化学的酸素要求量	≤ 10.0	測定範囲以下
調査：大正（吾川） 資料：四万十高校自然環境部											